

忘れ傘

半村良



忘れ傘
半村良



八

集英社

忘れ傘 わす がさ

一九八五年八月二十五日 第一刷発行

定価 八八〇円

著者 半村良 はんむらりよう

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋一五一一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一八四二

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六七

製作課 (〇三) 二三八一九六四

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら小社製作課あて
にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたし
ます。

忘れ傘——目次

秋子の写真

5

よく会う女

35

紗あわせ

63

かぎ

93

愛していたのに

121

忘れ傘

151

装
幀

村
上
豊

忘れ傘

秋子の写真

人さまに可愛がられる人間になれ……と、私はよく母に言われた。

自分の子だから少しはよさまの子供より出来がいい筈、といううぬ惚れを持ちながら、他人を押しつけて最前列へ出て行くほどの能力などあるわけがないと、母ははじめからきめてかかっていた。

「お前だって真面目にやれば人なみに暮らしては行けるのだから」

と、口癖のように言い、読書が好きな私の性格を大いに警戒した。

「小説を読むような者はろくな人間にならない」

母はそう信じ込み、私の耽読を嫌って時には蔵書を焼いたりもした。だがそれも私が中学生ごろまでのことで、高校生になつてからはさすがに口出しをしなくなったかわり、私

の将来についてはなかなば諦めた風情であった。

いわゆる母子家庭で、長男の私を昔の都立第三中学へ入れはしたものの、それが学制改革で新制高校に切りかわると、中学の五年で社会へ出すつもりが一年のびて六年間の在学期間になり、

「新制になったおかげで一年損をした」

と冗談半分の愚痴を言っていた。旧制の都立第三中学は、今の両国高校である。

終戦が昭和二十年の八月十五日で、翌二十一年の四月に中学生となった私たちにとって、スポーツと言えば野球くらいなものだった。私もはやばやと硬式野球部に入って補欠のキャッチャーをしていた。しかし、女の細腕が支えるかつかつの暮らしでは、揃いのユニフォームが買えるわけもなく、私は古い軍服を仕立てなおした国防色のユニフォームで、最後まで通してしまった。

そんな状態だから、長男の私が稼ぎはじめる日を楽しみに、じっと耐えている母の気持は痛いくらいよく判っていた。判ってはいたが母が期待するような実直な人間にはなれず、煙草は喫う酒は飲むといった、手のつけられない高校生だった。もっとはっきり言えば、吉原で女の味を覚え、高校生のくせに洲崎へ出入りするまでになっていたのである。

その小遣いの出所^{でせう}は、銀座でのアルバイトだった。その頃の銀座はアメリカ兵の街で、私は進駐軍相手のバーのカウンターの中へ入って黒い蝶ネクタイなどしめ、いっぱしのバーテンづらをしていたのだ。かたことの英語でも喋ればましなほうだったから、高校生の語学力でも利用価値があったわけである。

それに、アメリカ兵たちは昼間から飲み歩くのだ。大学進学のための受験勉強や模擬試験の必要がない私にとって、昼間の銀座のバーは願ってもない稼ぎ場だった。

夕方になると女給たちや本物のバーテンがやって来て昼間の組と交替する。ホステスという呼びかたが一般的になるのはもつとずつとあとの、東京オリンピックあたりのことだ。当時でも現役の高校生が銀座のバーで働くのは珍しく、店の女たちは随分私を可愛がってくれた。

人さまに可愛がられる人間になれ……と、母は私に教えたが、そんな可愛がられかたがあるうとは思っても見なかっただろう。高校の最後の一年間は教室へ出ることも稀れで気儘に過ごし、卒業するとすぐ日本橋の紙問屋へ就職した。

それは、就職、というより奉公に出されたと言ったほうがふさわしい感じであった。主人の家の坊やのお守りから、夕方のお惣菜の買物などにも走り、おもな仕事は倉庫番と自

転車による配達だった。

この仕事では駄目だ。……勤めて半年もするとそう思いはじめ、自分をそんな職場に送り込んだ母親に腹をたてた。紙問屋で一人前になるには十年以上かかるし、まして独立するとなれば資本も必要だ。一生かかっても独立できるかどうかとも判らない。給料は四千円に交通費が五百円。私が一家を支える日が来るのを待っているにしては、選振が迂闊すぎると思った。十年先輩の給料が一万いくらで、まだ嫁ももてないでいるのだから、私の稼ぎが一家三人を支えるに足るようになる頃には、肝心の母が老いて死んでしまうかも知れない。

生まれてはじめて、私は暮らしのことで母と真剣に話合った。

「勤めて人に使われていては駄目だ。どんな小商いでもいいから店を持つほうが得だ」

そういう私の主張には母も頷くのだが、さてそれではどんな商売をするかという段になると、はじめから胡散臭がって、まるで取り合おうとしない。父の唯一の遺産である家と土地を売り払ってその商売の元手にしようというのだから、母が二の足を踏んだのも当然だが、私にすれば随分もどかしかった。

「俺のような若い男が、比較的短期間に店を持って一家を支えられるようになるには、飲

食店しかない。お袋は堅い勤めばかりに目を向けるが、それがうまく行かないことは今の紙問屋で判った筈じゃないか。俺は水商売の世界でしばらく修業するから、この家を守って今少し辛抱して欲しい。これでいいとなったたらすぐ家売って商売をはじめよう。お袋に楽もさせられるし、弟も大学へやれる」

膝詰めでそうかき口説くと、根負けしたのか、真に受ける風でもなく、

「お前の好きなようにおやり」

と突き放すように言った。しめた、とばかり私は紙問屋をやめ、何カ月ぶりかで銀座のバーへ行き、目をかけてくれた姐さん株の一人に相談を持ちかけた。

「やだわ、この人。本気なの……」

その女は話を聞くと薄気味悪そうに言い、母そっくりの目で私を見た。

「俺は真面目だ。これよりほかに道はないと思っている」

そう言ってしつこく頼むと、渋々こしをあげて向島の〈晴海〉という小さな料理屋へ連れて行って、そこ板前に紹介してくれた。料理人になりたいと言ったわけではないのだが、彼女は彼女なりに私の進路を考えてくれたのだろう。

「お前のこれじゃねえだろうな」

板前は私の目の前で、彼女に向かい小指を立てて見せた。とたんに私はその姐さんに女を感じてしまった。それまでもなんでもなかった相手が綺麗で色っぽく見えはじめ、板場の下働きのようなことをしながら、口実をこしらえては三日にあげず逢いに行き、一年もたたぬうちに彼女を、明代、と呼びすてにするような仲になってしまった。

本所菊川町の友人の家に、居候だか下宿人だかよく判らない有様で居ついて、月の半分はその、明代、のアパートにいた。

それがはじまりだった。明代のバトロンの私のことがばれかけると、伊豆の伊東で一年ほど庖丁を握り、帰って来るとせつかくの板前修業をうっちゃらかして、また銀座のバーテンに戻ったりした。いくらか料理の心得があると、バーテンとしての利用価値がぐんと高くなるからだ。

いずれにせよ、私は紅い灯のかげで暮らすことが好きでたまらなくなっていた。にぎやかで淋しく、派手で怪しく、気の強い奴がよく泣く世界だった。ことに、そこに住む女たちはみな辛い生き方をしていて、私と同じように貧しい者ばかりだった。たとえ札びらを切るような遊びっぷりをしたところで、それはつつましくしていれば貧しさに負けてしまいうからそうするのであって、そこに長く留まりたいと願う女など一人もいはいないのだ。

そのころ、私はよくサンタクロースになりたいと思ったものである。彼女らが切実に欲しがっている物を、私はよく知る立場にいた。万事豊かになった今の銀座とは違い、当時の女たちにはそれぞれ扶養家族がいて、自分の腕時計やハンドバッグまではなかなか手がまわらなかったのだ。

だが、そんな女たちに囲まれて酒を飲んだ昔の客は、今の客よりずっとしあわせだったのではあるまいか。いまのホステスは、客よりいい暮らしをしていかなれない。私が親しくした女たちは、客の有難さをよく承知していた。

とにかく、あつちに引つかかり、こつちに引つかかり、あげ潮のごみみたいな生活の最中、母に呼ばれて家へ行くと、

「たしかにお前の言う通りだね」

と何年も前の話の返事をされた。家を売って商売をしなければ食って行けないことが、母にも身にしてみても判^わつたらしい。

「いつまでお前を待っていても埒^{うち}があかないから、いっそ旅館でもはじめようと思うんだ

よ」

誰かがそういう話を持ち込み、その気になったようだった。

「そういう旅館で出す飯くらいなら、俺にももうできるぜ」

「まだあたしのが上さ」

余程^{はち}肚を据えたと思え、母にはそう言つて笑うゆとりがあった。

で、母子三人が住みなれた家を離れ、蒲田で旅館をはじめたのだが、やはり母は甘かった。駅前の商人宿くらいに思っていたのが、実は連れ込み専門のさかきくらげだったのだ。客はいくらでも来てくれるのだが、母は欺^{だま}されて宿場女郎に売りとばされた娘みたいな様子で、鬱々としてたのしまない。

でも、よくはやるから経済的にはだいぶ楽になって、私にも帳場に坐つて小説を読んだり、一句ひねったりする時間ができた。

一句ひねると言つても、俳句ではなく川柳である。当時、新日本川柳という同人誌があつて、私もそこへ会費を納め、投稿などしていた。小説新潮に投稿した川柳が載り、新刊書を一冊褒美にもらったら、その本を母が神棚にあげてしまったのでびっくりしたことがある。何しろ、私が小説を読むことを嫌い抜いていたのだから、母のそういう態度がどう